



『今を生きる思想

宇沢弘文 新たな資本主義の道を求めて』

佐々木実 著

講談社現代新書 刊 (TEL03-5395-3615)

定価880円 (本体800円+税)

岩波・中公と並ぶ教養系新書の御三家といえは講談社現代新書だろう。書籍や雑誌などの紙媒体マーケットが縮小するなかで、教養系新書の環境も厳しい。本文を100ページ程度に抑えて創刊した「現代新書100(ハンドレッド)」はそうした現状に挑み、若者の読書離れやデジタル系の攻勢を念頭に置いた「一気に読める教養新書」を目指している。

新シリーズには3つのコンセプトがある。①それはどんな思想なのか、②その思想はなぜ生まれたのか、③なぜその思想がいま読まれるべきなのか。本書はその3冊目だ。宇沢弘文に師事し、師の生涯や功績を追跡して注目されるフリーランスのジャーナリストが、戦後日本を代表する経済学者・思想家の全容を平明に描き出している。

宇沢といえは、「環境」を経済学の対象に取り入れた「社会的共通資

本」というキーワードが思い浮かぶ。その「社会的共通資本」について「3つの範疇」を本書から引用しておこう。「①大気、森林、河川、水、土壌などの自然環境、②道路、交通機関、上下水道、電力・ガスなどの社会的インフラストラクチャー、③教育、医療、司法、金融などの制度」だ。

宇沢は説く。「社会的共通資本は、一人一人の人間の尊厳を守り、魂の自立を支え、市民の基本的権利を最大限に維持するために、不可欠な役割を果たすものである」(『社会的共通資本』岩波新書)と。数理経済学の最先端で世界的に活躍していた宇沢が、ベトナム戦争などを機に「自然と人間の関係をも射程に入れた」独自の経済学を構築するために「行動する経済学者」に転じていく軌跡は本書に委ねる。

資本主義が生み出す格差と分断が深刻化し、環境破壊が地球規模で広がるいまこそ、「万人が幸福になる道」を探った宇沢の思想が輝きを増している。
さんかいのげん
(山海野 玄)